

(三) 龍泉寺 (福山市神辺町川北)

龍泉寺は帰谷(かえりだに)にあり、山号を「新宮山」とする曹洞宗の寺院である。神辺城とかわりも多く、戦国期の武士たちの墓所と伝えられる墓がある。近くには茶山の父祖の眠る本荘屋菅波家の墓所や網付谷には茶山やその親族たちの眠る菅家墓所もある。

(二) 龍泉寺の縁起 (福山市神辺歴史民族資料館ホームページより)

寺伝によると建武二(二三三五)年に神辺城を築城した浅山景連(あさやま・かげつら)のち朝山)が、同時期に菩提寺として丁谷(ようろだに)に建立した「清水山(せいすいざん)雲溪庵(うんけいあん)」を始まりとしています。



代々城主の菩提寺として栄えますが、その後、積雪により大破。無任となり衰微してしまいます。そして、慶長七(一六〇二)年三月、目黒新左衛門の孫の政貴の願いを受け、当時の神辺城主・福島丹波(たんば)が再建。この少し前に現在「龍泉寺」のある帰谷には、「龍興寺(りようこうじ)」が建立されており、「雲溪庵」はその末寺とされました。その後「龍興寺」は、福山藩主・水野勝成により福山城北の吉津(現福山市北吉津町)へと移され、その跡地に丁谷から「雲溪庵」を移して「龍泉寺」と改称したそうです。「龍泉寺」の開基(初代住職)は嶺外梵雪(れいがいぼんせつ)和尚と記録がありますが、これは「龍興寺」の二代住職にあたり、「龍興寺」移転後そのまま「龍泉寺」の初代を務めたようです。さらに、「備陽六郡志」によると「龍泉寺」の前には「天徳寺畑」と呼ばれる畑があり、「龍興寺」の建立前(いつ頃は不明)には「天徳寺(その後、播州さらに大坂へ移転)」なる寺があったとされています。近年の開発でこの周辺からは、古い墓石等が出土されています。また、菅茶山編纂「福山志料」によれば、奈良の「興福寺(こうふくじ)」から接木として持ち帰った「車返しの桜」と呼ばれた古木があり、花見の名所として賑わいましたが、一七〇〇年代後半には花の数は減り、衰えたようすを伝えていきます。

福山志料(菅茶山編纂)には

新宮山曹洞宗龍興寺末寺此寺モト川南會下カ窪ニアリ利山道器居士ト云モノ建立ニテ開山租堂和尚ナリイツレノ時代ト云コトヲ知ラス福島丹波紅葉山ノ城ニアリシ時今ノ返り谷へ移シ天和年中水野家當城ヘウツラセ玉フ參州ヨリ泉龍寺ヲ召連ラレ當寺ヲ宿トス福山開城ノ後カシコヘ引テ慈雲山龍興寺と號スソノ跡今ノ寺ナリ寺中ニ車返シノ櫻アリ

とあり、福山築城の際、福山に移転していった寺院の跡に移転してきた寺院の一つである。文中にある「車返しの桜」は有名で茶山も詩友と桜見物に出向いている。福山志料にも詳しく記載されているので紹介する。

運和尚ト云住持ノ時南都ノ車返ノ枝ヲ折來リテ接木トスト云桐カ谷ト云櫻ハ八重ノ中ニ一重ノ英マシリシ花見シ人八重ナリ一重ナリト云争ヒニ車ヲカヘシテ見タリト云コトヨリ桐カ谷ノ一名ヲ車カエシトモ云此花スナハチ桐カ谷ナリト云三四十年前ハ花見ノ人多ク枝コトニ短冊ヲツケテ青葉紅實ノ頃マテ残りシニ近頃ハソノコトナシ花モ亦昔ニ劣レリ此寺ノ堂方丈モト東ニアリテ庭ヒロク日影ヨクサシマワリシ時ハ枝條多ク榮ヘヒロコリテ今ノ玄關マテモト、ケリ堂方丈ヲ引マ

ハサントセシ時此寺ホトノ寺ハ近所ニイクツモアリ此花ホトノ花ハ隣國マテモナケリハ屋宇ノ大ナランヨリハ花ノ榮ヘンコトヲコソ佛モメテタマワラメト云シ人アリツレトモ當住禪卓用キサリシカ果シテ花ハ衰ヘカリシケタリト云

二 茶山と龍泉寺

茶山は梅や桜を見るために度々ここを訪れている。菅茶山略年表（菅茶山記念館発行）・菅茶山（富士川英郎）等から拾ってみる。

年号	西暦	茶山の動静
天明五年	一七八五	3/11 頼杏坪・西山拙齋・姫井桃源と竜（龍）泉寺に遊ぶ
六年	一七八六	3/24 拙齋・孝恂・東嶼と竜（龍）泉寺・萬念寺・西福寺に遊ぶ
寛政二年	一七九〇	3/3 拙齋・如実上人と龍泉寺に遊ぶ

孝恂 西山拙齋の子 東嶼 志村東嶼。仙台藩儒官 如実上人 国分寺住持

龍泉寺に登ったのはいづれも三月。旧暦三月だから桜見物と推測できる。また、梅を詠った詩も残っているので、度々この寺を訪れている。

三 龍泉寺にまつわる詩を紹介する

龍泉寺櫻	黄葉夕陽村舎詩	前編 卷二
寺有亡友蘭水墓	寺に亡友蘭水の墓有り	
老樹移來幾百春	老樹（ろうじゆ）移し來（きた）つて幾百春（いくひやくしゆん）	
年年麗艷占芳辰	年々（ねんねん）麗艷（れいえん）芳辰（ほうしん）を占（し）む	
林東在墓生苔鮮	林東（りんとう）墓有り 苔鮮（たいせん）を生ず	
曾是花前鬪酒人	曾（かつ）て是（これ）花前（かぜん）酒を鬪わせし人	

本堂前の詩碑

麗艷 なまめかしいうるわしく。 占芳辰 花咲く春の好季を我物顔に咲く。

苔鮮 こけ。 墓 蘭水（藤井暮庵の父）の墓所。

（大意） 桜の老樹を移し植えて幾たび春が過ぎたであろうか。年々美しくあでやかにこの春をほしのままに咲き誇っている。林の東には墓があり、苔が生えている。かつて生前には、この花の前で酒を酌み交わした相手（蘭水）であったのに

*老樹は「車返しの桜」である。共に桜見物をした蘭水を偲んでいる



梅花七首の一	黄葉夕陽村舎詩	前編 卷一
見説龍泉寺畔梅	見るならく 龍泉寺畔の梅	
今朝始観一枝開	今朝始めて一枝の開くを観（み）る	
屐痕斜印幽蹊雪	屐痕（げきこん）斜めに印す 幽蹊（ゆうけい）の雪	
知有吟朋先我來	知んぬ 吟朋（ぎんぼう）我に先んじて來たる有るを	

見説 「見るならく」と読む。 畔 ほどり。 屐痕 屐は下駄の事で、二の字に下駄の跡がついて

いたようす。 知「知んぬ」と読む。 吟朋 詩を吟じ詩を口ずさむ友。
 (大意) 龍泉寺の境内に梅がやつと咲いたらしい。誰よりも早く見てやろうと狙っていた。雪の降っていた早朝、龍泉寺に行ってみると、下駄の二の字、二の字の足跡が続いている。文人仲間の誰かに先に見初めをやられた。

龍泉寺花下作	龍泉寺花下の作	黄葉夕陽村舎詩	後編 卷二
花木林中愛日長	花木林中 日の長きを愛で		
禪房三月好風光	禪房三月 風光を好み		
百年人世如泡影	百年の人の世 泡影の如し		
會友看春能幾場	友と会い 春を看る 能く幾く場ぞ		

四 詩友を案内したり弟子たちと出かけている

歸谷尋花是會與伯民同遊之所此以寄	黄葉夕陽村舎詩	後編 卷七
歸谷に花を尋ねる 是れ會つて伯民と同遊せし之所 此を以つて寄す		
芳芷香芹□路迷	芳芷(ほうし) 香芹(こうきん) □路(かんろ)を迷う	
憶曾柑酒此相攜	曾て柑酒を此に相携えしを憶う	
櫻花不改杯中影	櫻花改めず 杯中の影	
人在春江千里西	人は春江千里の西に在り	

□に間、谷川、谷。 カン、ケン
 芷 よろい草、よい香りの水草 芹 せり。 柑酒 田園に遊ぶこと(中国宋代の故事)

* 南部伯民 (一七七〇〜一八二三)
 周防の国三田尻の人。萩藩清末侯に医師として仕える。西国街道の行き帰りに、度々茶山を訪れている。文政四年(一八二二)には、藩主清末侯を案内して廉塾を訪れている。

「龍泉寺に遊びて」と題する茶山と拙齋の歌が福山志料にある。
 むかし誰花にくるまやかえり谷今も櫻の春そふりせぬ 西山 正(拙齋)
 おなしとき 志村 直(東嶼)
 八重ひとへたてぬ花の色に誰ころまとひてかへす小車

拙齋と東嶼らと龍泉寺に登ったのは、天明六(一七八六)年三月二十四日のことだったのだろう。
 茶山と出かけた弟子たちも詩を詠んでいる。文意は略。(菅茶山とゆかりの人々 菅茶山記念館)

龍泉寺	門田朴齋
誰移寧楽種	誰か移さん寧楽(ねいらく)の種
山寺一株櫻	山寺に一株の櫻
不断人遊賞	人遊び賞すこと断(た)たず
猶呼車返名	猶(なお)、車返しと名づけ呼ぶ

寂々一狐村 寂々(せきせき)たる一狐(いつこ)の村
 春來無勝事 春來たるより勝事(しょうじ)無し
 為晤白櫻花 晤(あき)らかに為す白櫻花(はくおうか)
 人間龍泉寺 人間の龍泉寺

*門田朴斎は、一時期茶山の養子になったが、後離縁になった。小早川文吾は神辺の医師。

【ちよつと休憩】

一 藤井蘭水・暮庵墓地

詩「龍泉寺櫻」には脚注で「寺有亡友蘭水墓」とある。茶山が車返しの桜下で杯を交わしたのは藤井蘭水で、友であり支援者であった。藤井家は代々川南村の庄屋であった。当主藤井茂清は後継の男子に恵まなかったため、佐藤氏から養子(澹齋)を迎える。その後茂清に男子が誕生(後の蘭水)したので、別家を興す。澹齋は隠居後、藩から「大郷の老」に任命され活躍し、帯刀を許されている。澹齋は茶山の支援者でもあった。澹齋は男子二人をもうける。藤井家を継いだ蘭水は後継者に恵まれなかったため、澹齋の次男を養子にもらう。この人が、後の暮庵である。暮庵は茶山に入門。廉塾の都講ともなっている。一時期京都に出向くが、後に川南村に私塾「南北春水村舎」を開く。龍泉寺裏の墓地に、蘭水と暮庵の墓がある。



藤井家墓域

二 茶山の梅好き

先の「梅花七首の一」は、梅への愛着がみえる詩である。茶山は丁谷(神辺)栗根(加茂)栄谷(郷分)、三原の西野梅林まで賞梅に出かけています。次の詩もまた梅好きがわかる。

即事	即事	遺稿	卷七
山童持紙道書詩	山童(さんどう)紙を持ちて	詩を書くを道(い)う	
老嫻揮毫人所知	老いて揮毫に嫻(ものう)	きは人の知る所	
今速應求吾有意	今速(すみ)やかに求(もと)	めに応ずるは吾に意有り	
明朝願拗早梅來	明朝願わくば早梅(そうばい)	を拗(よう)してきたれ	

山童 山男。揮毫 毛筆で書や絵をかくこと。嫻 たいぎで気がすすまない。吾有意 わしに魂胆があるということ。拗 ねじる。手折る

(情景) この詩は文政十年の亡くなる年の作である。妻の宣が亡くなり、悲しみに暮れ落ち込んで、書を書くのも億劫な気持の毎日であったろう。そこに山男が「先生、一筆書いてください」とやってきた。茶山先生は「もう書を書くのは気が進まん」と。山男はそれでもひつこく頼むので茶山は一計を案じて「明朝、早咲きの梅の枝をもって来なさい。書かんでもないから」と。

三 武将にまつわる供養塔や墓が寺の東側に並んでいる。

① 目黒新左衛門の古墓と伝えられている墓がある。福山志料は陰徳太平記を基に次のように記している(現代文で要約すると)

「天文十八年（一五五二年）神辺城主山名忠興が大内氏を裏切り尼子氏に加わると、大内氏は陶、毛利など一万の軍勢で神辺城を包囲した。しかし、なかなか落城しなかった。尼子氏は神辺城を支援するため、目黒新左衛門に五百名の兵をつけて派遣した。しかし、途中で出雲に落ちようとする山名理興に会い落城を知った。目黒新左衛門は必ず支援すると誓ったのにそのまま出雲には帰れないと五百の兵を理興につけて返した。目黒新左衛門は一人神辺に来て、敵方の平賀氏に検視をつけてもらい近くの禅院で自害する。平賀氏は懇ろに弔い、首を出雲に届けたという」



伝 目黒新左衛門の墓

とあり、苔むした古塚である。

② 神辺城を攻めた藤井皓玄との攻防戦で戦死した家臣達の墓

寺にはその戦いで亡くなった十名の武士の位牌があると言う。苔むした一群の墓がそうではないかと言われている

龍泉寺を訪れた西山拙齋が詠んだ歌が福山志料にある。

あはれなりちりし紅葉の山かけに名はうつもれる苔の古塚



伝 戦国武士たちの墓

三 伝 織部灯籠（キリシタン灯籠）

山門入口の右側に灯籠がある。「キリシタン灯籠」ではという話が伝わっている。籠灯は織部燈籠で、キリシタン灯籠ともいわれ、戦国時代の武将であり茶人であった古田織部が考案したとされる灯籠で、キリシタンであったのでそう呼ばれるようになったとされている。県内では鞆・三次にあると言われている。



伝 織部灯籠

参考文献

菅茶山とゆかりの人々
福山志料 復刻版
黄葉夕陽村舎詩 復刻版

菅茶山記念館
芸備郷土誌刊行会
児島書店